

学位論文審査の結果の要旨

1. 申請者氏名	富岡直美
2. 審査委員	主査：（鳴門教育大学教授） 皆川直凡 副主査：（鳴門教育大学教授） 川上綾子 委員：（岐阜大学教授） 益子典文 委員：（鳴門教育大学教授） 久我直人 委員：（鳴門教育大学教授） 田村隆宏
3. 論文題目	社会的責任の意識を高めるキャリア教育の方法と評価 —自己決定理論の枠組みからの検討—
4. 審査結果の要旨	<p>論文提出による学位申請者 富岡直美 から申請のあった学位論文について、兵庫教育大学学位規則第16条に基づき、下記のとおり審査を行った。</p> <p>論文審査日時：令和5年12月14日（木） 16時00分～16時45分 場所：リモート会議による審査（主催：鳴門教育大学 皆川研究室）</p> <p>1) 学位論文の構成と概要</p> <p>(1) 論文の構成</p> <p>第1章 緒言 第2章 大学教職員を対象としたUSR研修の開発と評価 第3章 CSRの価値認識と仕事の動機づけとの関連 第4章 大学教職員を対象としたUSR研修の改善と評価 第5章 大学生を対象としたSSR研修の開発と評価 第6章 結語</p> <p>(2) 論文の概要</p> <p>本研究は、社会正義を目指すキャリア教育を推進するために、社会的責任（Social Responsibility；以下、SR）の観点から自らの活動の価値を認識することにより自律的な動機づけが高まり、ワーク・エンゲージメントに正の影響をもたらすという仮説を実証し、SRの認識を高める大学生向けおよび大学教職員向けの研修を開発することを目的として行われた。各章の概要は以下のとおりである。</p> <p>第1章では、大学におけるキャリア教育の今後求められる方向性として、社会正義を目指す</p>

キャリア教育について概観した。そのうえで、教育心理学と産業・組織心理学の知見を総合し、SRというキャリア教育のテーマは、参加者が自分の行動や所属組織は社会的に価値があるという認識を高める効果がある理由を述べ、自己決定理論の枠組から考察して、SRに関連した社会的価値の認識が動機づけやエンゲージメントを高めるという仮説を立てた。

第2章では、社会正義の理念と方向性を大学教職員に浸透させるために、初任教職員を対象としたFD・SDとして、USR (University Social Responsibility) への意識を醸成するためのUSR研修を教育工学におけるADDIEモデルに沿って考案し、USRをテーマとして多様な立場の教職員とディスカッションするという研修方法を開発した。その1回目のサイクルを実施し、参加者の感想などを分析した結果から、参加者が所属大学や自身の仕事の価値を社会との関連から認識し、様々な価値観をもつ人々との対話により視野を広げるという成果を得た。

第3章では、仕事への社会的価値の認識が自律的な動機づけを介してワーク・エンゲージメントに正の影響をもたらすという仮説の実証をめざして、仕事のCSR (Corporate Social Responsibility) 価値認識尺度ならびに自律的労働動機尺度を因子分析を経て開発した。これらの尺度について、503名の正社員を対象として既存のワーク・エンゲージメント尺度と合わせて実施し、共分散構造分析をおこなった。その結果、従業員がCSRの観点から仕事の社会的な価値を認識することは、直接に、内的調整を介して、および自律的調整から内的調整を介して、ワーク・エンゲージメントを高めることが示唆された。

第4章では、第2章で開発したUSR研修について、参加者のアンケートへの回答の分析や、「教育・研修のインタラクショナルデザインのチェックリスト」を用いた内容のチェックによって再構築し、2回目、3回目のサイクルを実施した。第2章で開発した「仕事のCSR価値認識尺度」を大学教職員としての仕事の内容をふまえて改訂した「仕事のUSR価値認識尺度」を研修の前後に実施したところ、研修前から自らの仕事の社会的価値を認識していた人もそうでない人も研修後に価値認識が高まり、研修前に認識が低かった人は高かった人よりも変化が大きいことが示唆された。これにより、本研修には、大学教職員が自分の仕事に対して社会的価値の認識を高める効果があるということが明らかとなった。

第5章では、第4章で再構築したUSR研修を基にして、大学生を対象としたキャリア教育の一環としてSSR研修を開発し、その評価を行った。その結果、大学生においても教職員と同様に研修前よりも研修後に自身の大学での学びに対する社会的な価値の認識が高まることが実証された。また、大学での学びには、自らの価値を高める価値と、社会や自分の人生を豊かにする価値があること、それらは共創的対話によって深められることが見いだされた。自己決定理論の基本的心理欲求を満たす3つの感情も抽出されたことから、社会的価値の観点からの省察と対話を通して大学での学びの価値を内在化することにより、大学での学びに対する自律的な動機づけが高まり、それに伴ってエンゲージメントが高まることが示唆された。

第6章では、前章までに得られた知見を総合し、本研究の成果として、社会正義を目指すキャリア教育の実践研究および教育心理学における動機づけ研究に提供する示唆があげられることについて論述した。本研究における課題としては、研修の参加者数がまだ少ないこと、本研修の成果が研修後も長期にわたって持続するかや、実生活にも効果をもつかについては検証していないということをおげた。こうした観点などから、個人の幸福と社会の持続的発展の両立のために、キャリア教育が果たせる役割やその実践についての提言をおこなった。

2) 審査経過

(1) 研究目的と論文構成の整合性について

本研究の主な目的は、社会正義を目指すキャリア教育を推進するために、社会的責任（SR）の認識を高める研修を開発することである。そのために、キャリア教育に関する先行研究を精査し、自己決定理論の枠組から考察して、自己の活動へのSRに関連した社会的価値の認識が自律的な動機づけを高め、ワーク・エンゲージメントを高めるという仮説を立てた。そして、大学初任教職員対象のUSR研修を開発・実施し、参加者が所属大学や自身の仕事の価値を社会との関連から認識し、多様な価値観をもつ人々との対話により視野を広げるという成果を得た。また、その成果をもたらした要因の検証と、研修方法の改善をめざして新たな尺度を開発して既存の尺度と共に実施し、十分なデータ量と緻密な統計解析により、上記の仮説を検証した。これらの成果をもとに、インストラクショナルデザインの各過程に関するチェックにより改善した研修を実施し、本研修が参加者の社会的価値の認識を高める効果をもつことを実証した。また、その成果を基に大学生のキャリア教育におけるSSR研修を開発し、効果を検証した。以上より、本研究の目的と論文構成には十分な整合性があると判断された。

(2) 独創性と発展性について

教育研究を通じて社会の要請に応えることは大学の本来機能であり、近年、世界中の大学で「大学の社会的責任（USR）」が重視されている。日本でも大学経営や事務組織でUSRを取り入れる大学が増えているが、教職員全体に浸透させることを目的とした取り組みは少なく、そのための基礎研究も十分とは言えない。それに対し本研究では、社会全体を視野に入れた社会正義を目指すキャリア教育について、教育心理学と産業・組織心理学をつなぐ学際的な観点から考察し、教育工学におけるインストラクショナルデザインの科学的な手法によってUSR研修を開発したところに独創性がある。また、自己の活動へのSRに関連した社会的価値の認識の効果を大学教職員の初任者研修を実践して検証し、その成果を大学生のキャリア教育にも応用し、それらの効果の要因を検証するために尺度を開発し、開発した研修が自律的な動機づけを介してワーク・エンゲージメントを高めることを実証した点も独創的である。

本研究の成果は、更なる参加者データの蓄積、研修の成果が研修後も長期にわたって持続するかについての検証、参加者の生活や職業人生においても目的通りの効果を発揮するかについての検証、といった新たな課題を提示した。こうした観点などから、個人の幸福と社会の持続的発展の両立のために、キャリア教育が果たせる役割やその実践についての提言をおこなっていることから、研究の発展が期待できる。

(3) 社会的貢献について

本研究において開発した研修が参加者のエンゲージメントを高めて幸福に寄与すること、同時に研修を通じて組織や社会から求められるSRへの意識が醸成されることで、将来的に参加者が各自の社会的責任を果たす地球市民となり、その結果、社会の持続的な発展につながることを期待される。

3) 審査結果

以上により、本審査委員会は 富岡直美 の提出した学位論文が博士（学校教育学）の学位を授与するにふさわしい内容であると判断し、全員一致で合格と判定した。